東京大学 21世紀COEプログラム
心とことば ― 進化認知科学的展開

News Letter

No. 8 June 2006

21st Century COE Program
Center for Evolutionary Cognitive Sciences at The University of Tokyo

チンパンジーとヒトの比較から心の進化を探る

松沢 哲郎
（京都大学霊長類研究所）

チンパンジーの研究をアフリカと日本でおこなっている。野生チンパンジーの研究は、西アフリカのギニアのコミュニティーでみられる石器使用を主に調べた。彼らにも親から子へと代々引き継がれる、さまざまな道具使用の文化があり、そうした知識や技術の学習場面をもとに親子のきずなや教育のありさまを見てきた。飼育チンパンジーの研究は、アイと名づけたチンパンジーを主要なパートナーとして28年前に始まった。チンパンジーの見ている世界を、人間が使う文字や数字を教えることで引き出す試みだ。今ではアイと息子のアユムなど3組の母子を含んだ群れのまるごと全体を研究対象にして、人間の心とチンパンジーの心の比較研究をめざしている。「比較認知科学」と呼ぶ学問である。本研究拠点のリーダーである長谷川寿一さんと一緒に、「心の進化」（岩波書店）という題名の本を編集させていただいた。長谷川さんの主唱する「進化心理学」と、この「比較認知科学」は、一見すると双子のように似ているが、いわば出自がはっきり違う。進化心理学は、生物学的な進化とその理論が先にあって、そこから、生物の一種としての人間の行動を読み解く努力として生まれた。それに対して比較認知科学は、認知科学あるいは心理学という人間の心の研究を出発点としている。脳が心を担う器官であることはまちがいない。しかし脳は、骨や歯のように化石に残らない。頭蓋骨の容量は計測できても、心と呼ぶ実態は化石からはわからない。認知科学や脳科学が進歩して人間の脳の構造やしくみがどれほど解明されても、ひとつ重要な疑問が残る。「人間の心はいつどのように進化してきたのか」という問いだ。もし北京原人などのエレクタス人が生きていれば、あるいは3万年ほど前まで生きていたというネアンデルタール人が残っていれば、当然彼らに深く興味をもって研究を志しただろう。しかし、現在、地球上にはサピエンス人という1種だけの人類しか生き残っていない。だからこそ、チンパンジーという、約500万年前に遡ると人類と共通祖先をもつ存在に焦点をあてて研究してきた。彼らはこの世界をどう見ているのだろうか。そうした素朴な問いに発して、「進化の隣人」であるヒトとチンパンジーの心の比較研究をこれからも続けていきたい。

Contents

チンパンジーとヒトの比較から心の進化を探る……1
第3回国際ワークショップ「Social Cognition」……2
SALT 16……3
新しい研究動向―こんな研究をはじめました!…4-5
翻訳本の紹介「心とことばの起源を探る」……6
研究者紹介（その8）……7
活動報告（2005年9月～2006年5月）……8

第3回国際ワークショップ「Social Cognition」

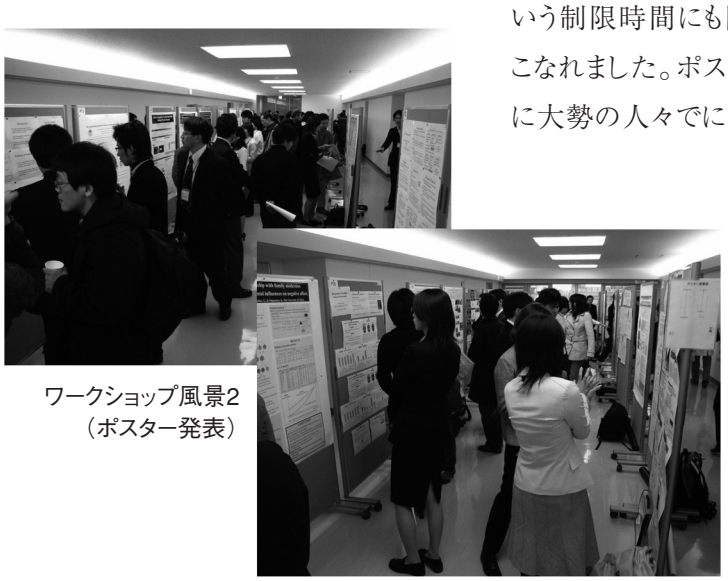
ワークショップ風景1（口頭発表）

2006年3月9日から10日の2日間にわたって、第3回「心とことば」COE国際ワークショップが駒場キャンパス学際交流ホールで開催されました。今回の国際ワークショップは、「Social Cognition: Evolution, Development, and Mechanism」と題して、進化、発達、そして、神経基盤の観点から社会的認知に迫ろうという趣旨です。参加者は約150名（このうち、ポスター発表者数50名）と、会場が少しせまく感じられるほどでした。

ワークショップの口頭発表セッションでは、この分野で国際的にご活躍の研究者を国内外からお招きし、最先端の話題提供をして頂きました。ここでは、海外からの招待講演者のご発表について紹介いたします（ワークショップで配布した抄録集は、COEホームページ：http://ecs.c.u-tokyo.ac.jp/activity/activity2006.htmlからダウンロードできます）。

9日にご講演されたLondon大学Birkbeck校のGergely Csibra先生には、社会的学習の基盤形成において重要となるヒト乳児期の認知的バイアスについて、多数の興味深い実証データとともにお話して頂きました。ハンガリー国立科学アカデミーのOrsolya Koós先生には、発達過程において随伴性の検出が重要な役割を果たしている点についてご講演頂きました。10日にご講演されたハンガリー国立科学アカデミーのGyögy Gergely先生には、模倣学習に関連する非常に興味深い研究事例とともに、Gergely先生とChibra先生が共同で展開されている理論の背景についてお話頂きました。どの講演に対しても、フロアから多数の質問がなされ、コーヒーブレイク中もご講演くださった先生をとりかこんで熱心な議論が続いていました。

このワークショップの開催報告を書くにあたって忘れてならないのが、ポスター発表の賑わいでしょう。特に、9日に設けたポスタープロモーションセッションは、有志の研究者が自らのポスターを宣伝するという企画で、5分という制限時間にも関わらず、聴衆を引きつける興味深い発表がおこなれました。ポスターは9日、10日と2日間にわたってはりだされ、常に大勢の人々でにぎわっていました。



ワークショップ風景2
（ポスター発表）

最後に、このワークショップは、嶋田総太朗さん（現 明治大学講師）と平井真洋さん（現 日本学術振興会研究員）、松田剛さん（本COE特任研究員）をはじめとする多くの若手研究者が中心となって企画・運営されたものです。彼らの若い力なしには、これほど成功しなかったと思います。この場をお借りして感謝します。

（開一夫、認知発達臨床科学部門）

SALT 16

3月22日から24日にかけて、東京大学駒場キャンパスにおいて、“Semantics and Linguistic Theory”学会の第16回年次大会（SALT16）が開催されました。当学会は、自然言語の意味論に焦点を当てた学会の中では、最も長い歴史を持っています。当学会が米国外で開催されるのは初めてのことであり、それが認められたことは誇りに思って良いでしょう。このような変化は、分野としての意味論の国際化を反映しています。意味論には非常に幅広い経歴を持つ研究者が集まってきていますが、世界的に見て、彼らのような研究者が育つ学科が増え続けていることは特筆に値します。当学会には109名の登録・参加があり、これまで日本で開催された意味論の学会の中ではおそらく最大規模のものとなりました。

意味論の分野が国際的な広がりを見せているということは、当学会の発表者が5、6カ国から集まっているという経歴からも伺えます。国際性は研究内容にも現れ、幅広い言語族に属する多様な言語から、言語の意味の形式的な理解のための知見が提供されました。当学会で発表された研究は、英語、日本語、イタリア語、ドイツ語、ルーマニア語、ブルガリア語、マケドニア語、フランス語に基づくものであり、その他の言語についての研究も同様に注目されつつあります。

国際学会としてのSALTの目的は、言語の意味論に対する我々の理論的な理解を進めることです。SALT16においては通例通り、招待講演と、競争的査読過程を経て選ばれた論文発表の両方が行われました。論文は、純粋に形式的な研究から、経験的データに基づいた研究まで、意味論の幅広いテーマを取り扱っています。

SALT運営委員会が選出した5人の招待講演者は、いずれも意味論の分野で第一人者と認められている研究者です。イレーネ・ハイム氏（マサチューセッツ工科大学）、ジェームズ・ヒギンボサム氏（南カリフォルニア大学）、アンゲリカ・クラッツァー氏（マサチューセッツ大学、アマースト校）、荻原俊幸氏（ワシントン大学）、そしてマリベル・ロメロ氏（ペンシルヴァニア大学）です。残る16人の発表者と2人の補欠発表者は、156件の応募の中から、世界中の意味論の専門家が104人参加した査読過程を経て選ばれました。フィリップ・ドゥ・グルート氏、フロリアン・シュワルツ氏、イラリア・フラナ氏、スタンレー・ピーターズ氏、ミケラ・イッポリート氏、エズラ・ケシェット氏、ジョルジオ・マグリ氏、中西公子氏、ジェシカ・レット氏、ダニエル・ロスチャイルド氏、ヨード・ウィンター氏、トム・ウェルナー氏、デヴィッド・オーシマ氏、ソフィア・マラムッド氏、ミカエル・ワグナー氏、田中拓郎氏、マグダレナ・シュワガー氏、フレデリケ・モルトマン氏です。

発表された論文は、7月にSALT16ウェブページ（http://research.nii.ac.jp/salt16/index.html）において閲覧可能となります。その後、コーネル言語学会から論文集が出版される予定です。

（タンクレディ・クリストファ、統合言語科学部門）
（訳：戸次大介、本COE特任研究員）

新しい研究動向―こん

動物の音声コミュニケーションの進化を探る

角 恵理（本COE特任研究員）

秋の夜、戸外で耳を澄ますと、さまざまな虫の声がきこえてくる。コオロギやキリギリスが属する直翅目昆虫の声が主なものであるが、種ごと個体ごとに鳴き声は異なる。また、同一個体であっても状況によって鳴き声が変わるものも多い。ヒトの耳でもバラエティー豊かにきこえるこれらの虫達の音声は、長い進化のプロセスを経て現在の形になったものであり、私の研究テーマは、まさにそのプロセスを考察するものである。

音声を用いたコミュニケーションは、直翅目昆虫以外にも多くの分類群の動物にみられ、複数の分類群で独立に派生してきたと考えられる。私はこれまでに、コオロギ、キリギリス、淡水魚、カエル、小鳥、ゾウの音声を研究する機会を得てきた。いろいろな動物の音声を研究すると、共通点と相違点がわかり非常に興味深い。

繁殖に関わる音声について言えば、生息環境で自種の特徴を際立たせるような音声信号を持つように進化してきたと考えられる点は共通するところである。例えば、私が研究しているエンマコオロギ類（図1）では、北海道から関東地方にかけてエゾエンマコオロギが、紀伊半島以南にはタイワンエンマコオロギが分布している。それら2種の分布域を含む形で、エンマコオロギが北海道から九州にかけて分布している。エンマコオロギは、分布の北型である関東地方以北ではエゾエンマコオロギと分布が重複し、分布の南側である紀伊半島以南ではタイワンエンマコオロギと分布が重複しているのである（図2）。これら3種の鳴き声を調べると、興味深いことがわかる。分布の重ならないエゾエンマコオロギとタイワンエンマコオロギでは鳴き声が非常に似ており、コオロギのメスにとっても判別が不確実になるくらいなのである。しかし、両種と分布の重複域を持つエンマコオロギの鳴き声は、他2種とは明らかに異なる時間特性を持っており、メスも同所的に分布する近縁他種と自種の歌を弁別できる。エゾエンマコオロギとタイワンエンマコオロギで歌が類似していても2種の分布は離れており交雑の可能性はなく支障はない。両種と分布が重なり、交雑の可能性のあるエンマコオロギにおいてのみ特化した歌を持つのである。進化の過程を経て、コオロギの歌が共存する近縁種の歌と判別しやすい配置、すなわち交配前隔離において有効に機能するような配置になっている状況は非常に美しくできており感動を覚える。このように、現在の歌の分布や形に説明を与えることに日夜頭を悩ませているのであるが、進化のプロセスの実際に迫るには、まだ数多くの課題が立ちはだかっている。

図1. 発音するエンマコオロギのオス。コオロギではオス成虫のみが発音する。

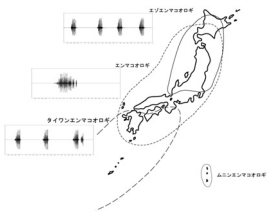


図2. エンマコオロギ類の日本列島上の分布と歌（calling song）の波形図（5秒間）

長大な進化のプロセスの全容を解明することは困難でもコオロギの歌の進化について少しでも知りたいと思い、コオロギの累代飼育によって歌の遺伝を調べる準備を始めている。世代ごとにコオロギのオスの歌を録音解析し、メスの選好性を調べ、人為選択を与えて行動形質の変化をみようと計画中である。現在は、行動形質の評価方法を検討している段階である。オスの歌の録音計測の手法は確立しているが、メス側の選好性を評価する方法はさまざまである。そこで、昨年度より、servosphere（図3）と呼ばれる球状の行動補正装置上でメスの行動を記録する試みを行っている。この装置を使用すると、音源に対するメスの歩行の角度や距離が正確に記録できる（図4）。オスの歌と雌の選好性の両方向から、世代を経るごとの変化を追いかけ、コオロギの歌の進化過程に迫りたいと考えている。

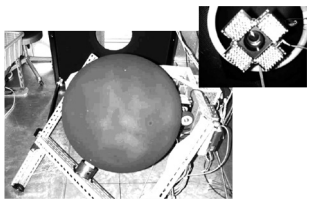


図3. Servosphere。右上写真のビデオトラッカーがServosphereの真上に設置されており、コオロギの位置のずれを読み取り、コオロギが常に頂点へ位置するように球を操作するしくみになっている。

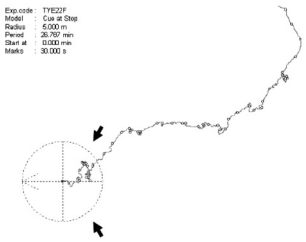


図4. Servosphere上でのメスの歩行の軌跡.音刺激は矢印で示した2方向からプレイバックした。

コオロギの鳴き声は繁殖期にのみ発せられるものであり、種分化や交配前隔離に焦点を絞った研究考察を行ってきた。カエル、淡水魚類、小鳥についても同様である。しかし、現在進めているゾウの研究は全く違う（図5）。対象としている低周波音コミュニケーションは、繁殖とは無関係な文脈でも発せられるもので、主に社会交渉に関わる音声である。グループの移動時やメンバー同士の再会時に発せられることがわかっている。そのような音声の場合、音声が伝える情報の可能性は多岐に渡り、その解析は非常に複雑なものとなる。私がこれまで関わってきた繁殖シグナルに特化した音声の研究からは異なる目線が必要であろう。現在、ゾウの低周波音の記録解析に成功している。今後は、行動観察を重ねて、音声が伝える情報を明らかにすることを目指して研究を続行中である。

図5. ゾウの低周波音の野外録音の様子。音圧計をマイクとして使用している。

な研究をはじめました！

潜在的ステレオタイプ

大江 朋子（本COE特任研究員）

人間が考え行動するとき、その思考や行動のかなりの部分を自分が制御しているという感覚が伴う。この感覚が幻想に近いという主張を、社会心理学は莫大な量の証拠と共に提示してきた。ステレオタイプや偏見が関わる場面もその一つである。ステレオタイプは特定の集団に関する知識として無自覚に形成され、容易に変化しない。そのため、偏見のない思考や行動をしようと努力する人でも、あるいは、自分はステレオタイプをもっていないと主張する人でも、ステレオタイプが自分の思考や行動に自動的に影響していることがある。このようなステレオタイプは、その存在や影響を自分で自覚することが難しく、たとえ自覚していたとしても過小評価されがちであることから、潜在的ステレオタイプと呼ばれる。この20数年でのステレオタイプ研究の成果の一つは、潜在的ステレオタイプの存在と影響を巧妙な手法により顕にしたことである。

潜在的ステレオタイプの測定に利用される課題は、プライミング課題や潜在連合課題（Implicit Association Test; IAT）である。図1は、年齢ステレオタイプの測定に利用した潜在連合課題の一例である。実験参加者は、コンピュータ画面に提示されたターゲットをできるだけ速く正確に左右どちらかのカテゴリに分類する。ターゲットが顔写真の場合は「20代」と「70代」のどちらの顔かを判断し、単語の場合は「快」と「不快」のどちらを意味する単語かを判断する。参加者は判断を何度も繰り返し、各ターゲットの判断に要した時間が記録される。

例に挙げた潜在連合課題はステレオタイプ一致課題と不一致課題の2つで構成される。ステレオタイプ一致課題では「20代」と「快」を左に分類し、「70代」と「不快」を右に分類する（図1左）。ステレオタイプ不一致課題では組み合わせが替わり、「20代」と「不快」を左に分類し、「70代」と「快」を右に分類する（図1右）。「快」と「20代」の間、また、「不快」と「70代」の間の概念的な連合が強ければ、ステレオタイプ一致課題での反応は促進され速くなり、ステレオタイプ不一致課題での反応は阻害され遅くなる。したがって、不一致課題の平均的な反応時間から一致課題の平均的な反応時間を差し引いた値を、潜在的ステレオタイプの強さの指標とすることができる。

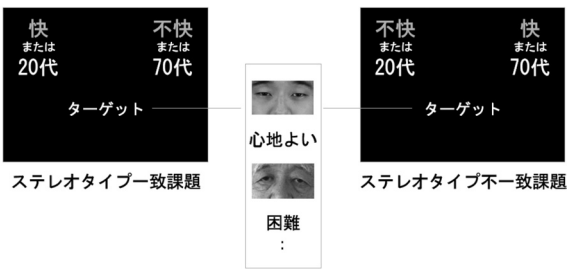


図1. 潜在連合課題の例。

これまでに200名を超える大学生を対象にこの課題を実施し、潜在的な年齢ステレオタイプが安定してみられることを確認している。そのうち、潜在的ステレオタイプの感情成分と認知成分のどちらが優先的に処理されるかを比較した研究では、感情成分が認知成分よりも優先的に処理されることを示す結果を得ている（図2）。注目すべきは、「たくましい - 優しい」IATの結果である。認知成分の活性化が優勢であれば、「20代」と「たくましい」、「70代」と「優しい」の連合が反映され、IAT得点は0より大きくなるはずである。しかし、IAT得点が0よりも小さかったことから、相対的に肯定的な「優しい」という特性が20代に、相対的に否定的な「たくましい」という特性が70代に結びつきやすくなったと考えられる。この効果は女性参加者においてのみみられ、男性参加者ではみられなかった。これは、女性参加者のほうが男性参加者よりも、「優しい」を「たくましい」よりも肯定的に捉える傾向が強いためだと解釈できる。ステレオタイプは、意味ネットワークの認知構造に依存して自動的に活性化されると考えられてきたが、この結果は、認知成分よりもむしろ感情成分が自動的に活性化されることを示唆するものである。

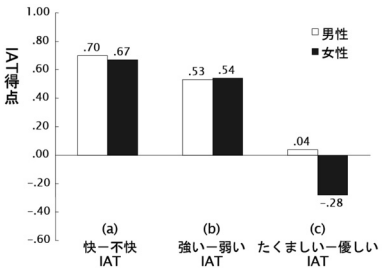


図2. 潜在連合課題の種類とIAT得点：
（a）感情成分のみを測定。
（b）（a）と同一方向の感情成分をもつ。
（c）（a）と拮抗方向の感情成分をもつ。

また、潜在的な年齢ステレオタイプと共感性の関係を調べた研究では、共感的配慮をする傾向が強いほど潜在的ステレオタイプが弱いことが明らかになった（図3）。共感的配慮を日常的に実行することが潜在的ステレオタイプの形成を妨げている、あるいは、共感的配慮に一時的に潜在的ステレオタイプを低減させる効果があるといった可能性が考えられる。現在、これらの研究を通して、感情と認知がどのように相互作用するのかを検討している。

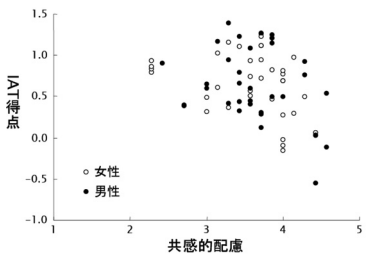


図3. 共感的配慮とIAT得点の相関：
IAT得点が高いほど潜在的ステレオタイプが強いことを示す。

翻訳本の紹介『心とことばの起源を探る』

「言語は本能ではなかった」ー本書の帯のコピーにはこうある。これは訳者の一人が提案したものである。最初は大げさかとも思ったが、マイケル・トマセロ氏（マックス・プランク進化人類学研究所 ライプツィヒ）自身、“Language is not an instinct” という題で書評論文を書いており、いざ本が出てみるとこれで良かったと思う。

われわれが研究者として自分の著作を褒めることは普通しないが、翻訳者として手がけた本を賞賛することは（訳の出来映えに対して謙虚な態度を保つ限り）問題ないだろう。『心とことばの起源を探る』は正しく良書である。本COE「心とことば: 進化認知科学的展開」のメンバーによって世に出せたことは僥倖だった。そして、この時期に本書を出せて良かったと思う。それはひとつには、言語進化論についての関心が高まる中、トマセロ氏のように、幼児の認知発達、霊長類の認知、そしてヒト言語のいずれの分野においても優れた業績をあげる研究者の発言は、最も傾聴に値するからである。言語学者はとかく、「言語をもつのはヒトだけである」という命題を尊重するあまり、他の動物との進化論上の連続性を十分に考慮しない恐れがある。一方、言語学の外部では、ヒトと動物の連続性を強調するあまり、ヒト言語の「示差的特徴」は何なのか、という問いが疎かになる可能性もある。これからは、言語能力をア・プリオリと考えるのではなく、言語をとりまく認知システムの役割をにらんだ上でヒトの特性に迫ることが、実りある学際研究には必要だろう。

いわゆる「生まれ（nature）」か「育ち（nurture）」かという対立は、過去数百年にわたって科学・思想界の一大問題だった。言語はその中で重要なテストケースとされてきた。しかし、本書とほぼ同時期に出た、Matt Ridley, Nature Via Nurture（2003, Harper Collins、邦訳『やわらかな遺伝子』紀伊國屋書店）からもわかるように、生まれか育ちかという二分法が、そもそも誤謬なのである。ちなみに、リドレーの本では、natureとnurtureという音のよく似たタームが英語にあったがゆえに、この問題が拡大されたのではないかと言う。それも元はシェイクスピアあたりまで辿り着けるらしい。詩人の語呂合わせは、近代西欧科学の営みをもマインド・コントロールしてきたことになるわけだ。

本書を読み込んで感じたことは、現代に「教養」を再構築するための知恵がこの本には詰まっているということである。「生まれ」か「育ち」かという論争の不毛を指摘するだけでなく、創造性とは何か、ヒトとチンパンジーの違いはどこにあるか、言語獲得の前提条件は何か、などの誰もが興味をいだく点について、本書はきわめて説得的な論を提供している。東京大学教養学部英語部会では今年、1年生用統一教材The Universe of Englishの後継テキストとしてOn CampusとCampus Wide（東京大学出版会）を送り出した。Campus Wideでは言語の本質を取り上げたセッションを設け、トマセロ氏の文章を本書の訳者の一人である西村義樹による入魂の注と共に収録した。テキストに取り上げたのは、本書とは別の論文からのパッセージであるが、駒場の学生たちがどんな反応を見せるか楽しみである。

最後に、本書をこの時期に出せて良かったと思う理由をもう一つ加えておきたい。今年の9月、The Fourth International Conference on Construction Grammar（ICCG4）という国際学会が東京大学駒場キャンパスで開催される。この学会の招待講演者の一人として、著者トマセロ氏も来日予定である。本書がより多くの方々の参加を促す呼び水となることを期待する。

（大堀壽夫、統合言語科学部門）

The Fourth International Conference on Construction Grammar（ICCG4）が開かれます
2006年9月1日（金）～3日（日）、東京大学駒場キャンパス
（http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~iccg2006/iccg2006.html ）

研究者紹介（その8）

田中伸一 （統合言語科学部門）

研究内容を一言でまとめると?

理論言語学を専門とし、特に音韻論・形態論という分野の研究をしています。19世紀後半に「音法則に例外なし」と青年文法学派は言いましたが、確かに音の世界には確固たる法則が存在し、例外もないわけではありませんが、その例外の中にも新たな法則性が見出せたりすると興奮を隠せません。また、各言語の話者がこうした複雑な音連続を、誰でも難無く獲得できたり普段の発話の中でうまく操れる事実も驚きです。このような音の世界を扱う研究分野を介して、言語学にとって科学的な方法論がどこまで可能であるのかを探りつつ、明確なパラダイムを整備・創出するのが究極の目標です。

COEでは主にどのような研究を行っていますか？

音の世界といっても何をどのレベルで扱うかで無限に広がり得ますが、私は諸言語の音体系におけるアクセントの役割に焦点を置いています。難しく言うと、音韻システム組成原理としての韻律構造（アクセント）を軸として、その生成メカニズム・類型論・歴史変化・獲得過程・レキシコンとの関連・分節音現象との相互作用などに広く目配りしながら、これら関連領域を包含する統合モデルの構築を目指しています。更に、この中期的な目標と上の長期的な目標に確かな展望を与えるため、音韻理論研究のための継続的な人的ネットワークの拠点を作るため、月1回の割合で「東京音韻論研究会」をCOEの共催で開催しています。「音韻理論」をテーマにしていますが、周辺分野とのインターフェイスを含む理論・実験双方からのアプローチからそれぞれ1つずつ、つまり1回の例会に方法論的に異なった研究発表を2つ含むものとし、互いに啓発し合っています。つまり、音韻論・音韻史・最適性理論・認知音韻論・実験音韻論・調音音声学・音響音声学・聴覚音声学・認知科学など、広く音に関わる領域を巻き込んで、音声科学一般の理論的基盤になり得るような音韻理論の拠点形成を目指しています。

楊凱栄 （統合言語科学部門）

研究内容を一言でまとめると?

中国語という個別言語の意味や文法の研究を行っています。最近は構文の意味機能について興味を持っています。一般言語理論を用いて、中国語においてまだ十分に解明されていない意味や文法に関するさまざまな問題を解明し、一般言語理論にも寄与できるような研究を目指しています。

COEでは主にどのような研究を行っていますか？

認知言語学の方法で、中国語におけるいくつかの全称詞（Universal Quantifiers）構文の相違を明らかにすることを目指しています。中国語では全称詞構文はすくなくとも次のような複数の方法で表すことが可能である。1.「誰＋都＋VP」“這種地方誰都想去”（こういうところは誰もが行きたいと思っている）、2.「誰＋也＋VP」“誰也不想去”（誰も行きたがらない）、3.「助数詞重ね型」構文「“他們個々都打扮得漂漂亮亮”（どの人もきれいに着飾っている）、4.「一＋助数詞重ね型」“大家一個々進来”（みんな一人ずつ入ってきなさい）などがあります。

これらの構文は集合メンバーすべてが述語と何らかの関係を持つという点においては同じであるが、その関わり方はそれぞれ異なるものです。スキャニングという観点からみれば、まず集合に対する一括スキャニングをする構文と逐一スキャニングをする構文とに分けられ、そして同じ逐一スキャニングをする構文の中でも、集合全体をプロファイルするものもあれば集合の個々のメンバーをプロファイルするものもあります。これらの構文は個々のメンバーに対するスキャニングの際時間との関わりにおいても違いが見られ、時間の推移を軸に展開する構文とそうでない構文とがあります。これらの構文の間に見られるさまざまな違いを明らかにしていきたいと思っています。

藤井聖子 （統合言語科学部門）

研究内容を一言でまとめると?

言語学の中で、特に、意味論、語用論、談話分析、および言語習得論を専門としています。主な研究対象としてきたのは、モダリティ・語用標識、および、節の接続・発話の連接で、条件・譲歩・理由・時などの複文の分析や、それらの談話における構築の分析です。これらを主に二つの視点から分析しています。一つは、談話の中で文法がどう使用され、制約され、構築されるか、また習得されるか、という問題です。もう一つは、文法構文の多義性・カテゴリー化の分析を通して、文法形式のカテゴリーと意味機能のカテゴリーとが各々の言語でどのように結びついているか、その結びつき方に言語間でどんな共通性とバリエーションがあるか、さらに、それらの言語的カテゴリーがどう獲得・習得されるのか、ある言語を獲得した話者が内的に形成した意味概念カテゴリーがどのようにその言語で言語化されているカテゴリーに影響を受けているか（いないか）等の問題を探究しています。

COEでは主にどのような研究を行っていますか？

「談話と文法」理論の観点から、日本語と英語の話しことば談話における言語使用を、文法構文の意味機能・その文法化・「語用標識化」に着目して分析しています。このような成人の言語使用の分析を第一の目的としつつ、それと同様の観点・理論背景・分析手法で、子供の文法能力・談話能力の発達・獲得を、両者の相互作用の所在を希求しつつ分析することを、第二の目的としています。これら二重の目的を踏まえた分析のために、成人および子供の話しことば談話データ（会話、対談、独話）を収集し、データ化して言語分析用資料（コーパス）を構築し、話しことば分析における諸理論（発話単位Intonation Units、転記法理論、等）を吟味しながら分析を行っています。具体的に取り組んできている分析課題は、1）「語り」の談話構造とその文法; 2）Intonation Unitsと統語構造との関連性、Intonation Unitsの機能構造; 3）談話における心的態度表意メカニズムとその文法; 4）談話における連接、談話標識、複文、接続表現の発話末用法; 5）選好的項構造、情報構造と談話における指示メカニズムなどです。子供の言語獲得の精査には、大人の言語使用の同様の分析が不可欠であること、逆に、大人の言語能力解明にはその発達的分析が必須であることを鑑みると、成人および子供の「談話と文法」の研究が平行して展開できる点が、COE「心とことば」で行っている藤井研究室の共同プロジェクトの特色であり意義である（ありたい）と思っています。

活動報告（2005年9月～2006年5月）

② COEシンポジウム・セミナー(共催のものも含む)

第32回：COE主催国際ワークショップ：
Third International Workshop on Evolutionary Cognitive Science
"Social Cognition Evolution, Development, and Mechanism"
日時：2006年3月9, 10日
場所：東京大学駒場キャンパス学際交流ホール
担当：開一夫
話題提供者：Gergely Csibra（University College London, UK）
Gyorgy Gergely（Hungarian Academy of Sciences, Hungary）
Juan C. Gomez（University of St Andrews, UK）
Orsolya Koos（Hungarian Academy of Sciences, Hungary）
板倉昭二（京都大学）
友永雅己（京都大学）
開一夫（東京大学）
村田哲（近畿大学）

第33回：COE共催国際フォーラム
Semantics and Linguistic Theory（SALT）16
日時：2006年3月22～24日
場所：東京大学駒場キャンパス
担当：Christopher TANCREDI
招待講演：
Irene Heim（Massachusetts Institute of Technology）
James Higginbotham（University of Southern California）
Angelika Kratzer（University of Massachusetts Amherst）
Toshiyuki Ogihara（University of Washington）
Maribel Romero（University of Pennsylvania）

第34回：COE共催フォーラム
Morphology and Lexicon Forum 2006
日時：2006年5月13日（土）～14日（日）
場所：東京大学駒場キャンパス学際交流ホール
担当：伊藤たかね
研究発表：
畠山真一、加藤恒昭、伊藤たかね（東京大学）「高知方言からみた思考動詞の語彙的アスペクト」
ナロック・ハイコ（東北大学）「日本語自他動詞対の類型論的位置づけ」
岸田眞樹（神戸松蔭女子大学大学院）「「自分」束縛に関わる述部と先行詞の語彙的性質」
菅原剛（東北大学大学院）「*Persuade* as an Infinitive-Taking Psych Verb」
玉井尚彦（京都外国語大学・大阪経済大学非常勤講師）「統語・意味と形態の対応－結果構文の統語的分析から―」
加賀信広（筑波大学）「接頭辞OVER-の分析―意味役割理論の観点から―」
加藤鉱三（信州大学）「デ格と二格の名詞句が担う意味役割」
黒田航、李在鎬、井佐原均（情報通信研究機構）「文中で名詞句が担う意味役割は「曖昧」になるのではなく、「複合」的になるだけである―複層意味フレーム分析（MSFA）からの知見」
淺尾仁彦（京都大学大学院）「分析性からみた日本語複合動詞」
望月圭子（東京外国語大学）「中国語における補文関係のV-V型複合動詞－日本語との対照から－」
玉岡賀津雄（広島大学）、レベント・トクソー（キャナッカレ・オンセキズ・マルト大学、トルコ）「新しく造られた短縮形の‘若者言葉’の波及―広島地域における世代差および性差からの検討―」
當野能之（神戸大学大学院）「スウェーデン語の動詞・不変化詞構文における項の実現」
岸本秀樹（神戸大学）「否定辞のスコープと主要部移動」

③ COE主催・共催研究会

第62回：COE共催研究会：意味論研究会
日時：2005年9月9日（金）午後4:30
場所：東京大学駒場キャンパス　18号館コラボレーションルーム3
担当：Christopher TANCREDI
講演者：大島義和（Stanford University）
タイトル：Motion Deixis, Reported Discourse, and Presupposition Projection

第63回：COE共催研究会：意味論研究会
日時：2005年10月21日（金）午後2:30
場所：東京大学駒場キャンパス　18号館コラボレーションルーム2
担当：Christopher TANCREDI
講演者：Richard Zuber（CNRS, Paris）
タイトル：Semantics of Presupposition Inducers
講演者：緒方典裕（大阪大学）
タイトル：Remarks on Kratzer's "Ordering-Premise" Semantics of Modalities and Conditionals
講演者：Eric McCready（大阪大学）
タイトル：Japanese Evidentials as Modals

第64回：COE共催研究会：意味論研究会
日時：2006年1月27日（金）午後4:30
場所：東京大学駒場キャンパス　18号館コラボレーションルーム3
担当：Christopher TANCREDI
講演者：伊藤怜（東京大学）
タイトル：Single-Pair Answers and Pair-List Answers in Wh-Questions with Singular Wh

第65回：COE共催研究会：第2回若手NIRS研究会
日時：2006年2月18日
場所：東京大学駒場キャンパス3号館113, 114教室
講演者：皆川泰代（慶應大学）
タイトル：母子の情動的結びつきと前頭前野：NIRS計測結果とアーチファクトの工学的シミュレーション

第66回：COE主催研究会：第2回Curry会
生体信号の解析手法勉強会
日時：2006年2月20日
場所：東京大学駒場キャンパス17号館COE「心とことば」赤ちゃん会議室

第67回：COE主催講演会：レイモンド講演会
日時：2006年3月3日
場所：東京大学駒場キャンパス3号館114室
担当：長谷川寿一
講演者：Michel Raymond（Université Montpellier II）
タイトル：Evolution of the polymorphism of handedness in human populations

第68回：COE共催講演会：東京音韻論研究会
日時：2006年3月24日
場所：東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム1
担当：田中伸一
講演者：Elisabeth O. Selkirk博士
タイトル：Minimalist Spellout of Prosodic Major Phrases

第69回：COE共催講演会：東京音韻論研究会
日時：2006年5月14日
会場：東京大学駒場キャンパス 10号館310会議室
担当：田中伸一
講演者：藤村靖（国際高等研究所）
タイトル：Sokuon and Long Vowels: What does Underspecification Mean for Articulatory Movement?
講演者：田中伸一（東京大学）
タイトル：On the Nature and Typology of Dissimilation

東京大学　21世紀COE「心とことば― 進化認知科学的展開」
〒153-8902　東京都目黒区駒場３丁目８番１号
東京大学駒場キャンパス17号館
ＴＥＬ／ＦＡＸ　03－5454－6709
ホームページ　http://ecs.c.u-tokyo.ac.jp
発　行　日　2006年７月15日